

氏名(本籍)	おのまさき 小野正樹(愛知県)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博乙第1953号		
学位授与年月日	平成15年9月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	埋め込み節をとる日本語動詞述語文の語用論的研究 - 「ト思う」を中心に -		
主査	筑波大学教授	Ph. D.	カイザー・シュテファン
副査	筑波大学教授		高田 誠
副査	筑波大学教授		砂川 有里子
副査	筑波大学助教授		杉本 武
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	坪井 美樹

論文の内容の要旨

1. 本論文の目的と基本的枠組み

本論文は日本語動詞文の中で埋め込み節をとる動詞述語文について、人間の精神活動と言語形式の関係を記述することを最終的な目的とする一連の研究の端緒に位置する論文である。「精神活動」は非常に抽象的概念であり、それを言語形式から追究するために、ある事態の捉え方と、発話の態度に分けることを提唱し、前者の範疇として、〈直接知覚〉、〈間接知覚〉、〈認知〉、〈思考〉、〈感情〉の5種を提案した。これらの「精神活動」は、事態の捉え方から発話の態度に至る過程が異なることを、一文内の時間的關係、否定の構造から指摘した。また、言語内容との関わりでは、「精神活動」と埋め込み節の文タイプ、言語形式との関わりでは、「精神活動」と補文標識「の」「こと」と助詞「ト」の選択から、5種の違いを規定できる。つまり、認識から言語化に至る最終的な発話の文機能から、「精神活動」と言語形式の関係を帰納的に記述したのである。これらの動詞の中で、唯一文末テンスが非過去では不自然にならない動詞に「ト思う」があり、モダリティ研究として分析を行った。

上記内容を、具体的事例で説明したい。「彼女がピアノを弾くのを見た」という発話について、「彼女がピアノを弾いた」という事態が言語的にはすでに現象文として表されているにもかかわらず、こうした表現が成立するのは「ヲ見る」という動詞によって〈直接知覚〉したことを説明し、メタ言語として述べているからである。この機能は事態を〈直接知覚〉したという証拠を聞き手に保証するものである。そして、〈直接知覚〉の規定に当たり、〈直接知覚〉が対象とできる言語内容は、演述型タイプのものであり、「彼女がかわいい」のような感情表出型を埋め込み節にとることはできない。また、言語形式からも直接知覚では、補文標識「の」をとることが必須であることを述べた。一方、感情表出型を埋め込み節にとる「ト思う」述語文については、日本語では「大学に行きたい」という主観を伝える場合に、「大学に行きたいと思う」のような表現をとる。ここでは〈思考〉をメタ言語的に「ト思う」で説明しているわけだが、なぜ「ト思う」が用いられるかについて、聞き手への働きかけの点から「ト思う」の本質を追究し、「頭が痛いと思う」のよ

うな誤用について、なぜ不適切かを述べた。

2. 理論的背景と先行研究

本研究は、語用論研究として位置づけられるものである。この理論的背景にはフィルモア（1975）の有効な提案がある。フィルモア（1975）の分析方法では、統語論〈Syntax〉、意味論〈Semantics〉、語用論〈Pragmatics〉を次のように区別している。

Syntax	[form]
Semantics	[form, function]
Pragmatics	[form, function, Setting]

意味論が統語論を踏まえ、また語用論が統語論および意味論を踏まえて成立すると考えている点が特徴的で、語用論研究に位置付ける本研究でも、統語レベル、また意味レベルで解決できるところは、積極的に分析し、処理していく立場を取った。setting については、ある文が発話される際の状況における話し手の状況を他の類似表現との比較からできるだけ記述した。また、語用論研究の中で、Lambrecht（1994）に見られる、前提、新情報・旧情報といった情報構造も、聞き手との関係で知識レベル、および意識レベルの精神活動として分析した。本研究では、特に知識レベル・意識レベルという概念を用いているが、これは赤塚（1998）で提案された「認知スケール」を発展させたものである。

一方、日本語の機能研究では、文末表現に注目する研究が多くなされており、一連の文末モダリティ形式はこうして追究されてきたものである。モダリティ研究では発話時の話者の心的態度が重要な課題と考えられている（中右 1999 等）が、埋め込み節をとる動詞も同様の観点から、蓋然性を含んだ確信、断定など命題（本研究では事態としている）に対する捉え方、および伝え方を探った。

3. 各章の内容

本論文の構成は、第 I 章から第 VII 章まで順を追って、論を展開した。各章で問題提起を行い、先行研究をまとめて、本研究の考えを述べ、それを発展させる形で、次章が展開されている。概略を述べると、第 I 章では先行研究の整理と本研究の基本的な考えを示し、第 II・III 章では、埋め込み節をとる動詞についての分析、そして、第 IV 章から第 VII 章では「ト思う」述語文を扱っている。以下に、各章の内容を述べる。

第 I 章で本研究の言語研究における位置づけ、意義を明らかにし、先行研究に触れながら、認識から発話までの過程を考え、本研究の考える情報構造のモデルを提案した。

第 II 章では本研究の領域に関わる文法的な先行研究を概観し、こうした動詞を『態度動詞』とし、動詞全般の中での位置づけを示した上で、態度動詞述語文の文機能を述べた。第 III 章では、『態度動詞』について、状況の指向する時間（ET）と認識の関係、また、認識時と発話時の関係をアスペクト・テンス形式や人称の観点から観察し、文の表す状況（事態）・認識の状況・発話の状況という 3 種の階層を説明し、3 種の階層の分析に基づいて、『態度動詞』の規定と分類を行った。あわせて小説等の事例を観察した。また、コミュニケーション機能として、知識と意識レベルと、認識と伝達レベルの、2 種の異なるレベルから分析した。

第 IV 章では、態度動詞の中で特異なアスペクト・テンス形式をもつ「ト思う」を取り上げ、「ト思った」の過去のテンス形式や、一人称以外が主体となる文についての情報構造を説明した。第 V 章では、「ト思う」と「ト思っている」のアスペクトの対立を、認識レベルと伝達レベルの観点から整理し、使い分けの要因を抽出した。第 VI 章では「ト思う」述語文のコミュニケーション機能を定義した。「ト思う」の原理を定義し、定義した原理を用い、て日本語学習者の誤用分析を行った。さらに、事例研究として、談話レベルの観点から、対談形式での「ト思う」の機能も追究した。第 VII 章では、文末モダリティ形式「のだ」「だろう」と「ト思う」を比較し、3 者の原理と用法を説明することで、「ト思う」の性質を明確にした。

4. 本論文の成果

「精神活動」と「言語形式」の関連を記述する本論文の成果を、三点にわたって述べたい。

第一に、従来埋め込み節をとる動詞述語文の研究では、3種のアプローチから進められてきたが、一つの視点で捉えなおしたことである。

- ① 動詞の分類からのアプローチ
- ② 補文標識・助詞からのアプローチ
- ③ 埋め込み節の内容からのアプローチ

こうした研究のうち、特に①と②の分析は形態的なものであり、③も含め、人間の認知メカニズムや、コミュニケーション上の働きについては未解決であり、本研究では情報伝達という語用論的機能にまで踏み込んで分析した。

第二の成果は、人間の精神活動の認識から伝達に至る過程のパターンを示したことである。認識については認知文法の領域として扱われてきたが、本研究では精神活動を知識レベルと意識レベルに分けた上で、動詞文の果たすコミュニケーション機能までの記述を行った。

第三の成果は、特に「ト思う」述語文の文機能を徹底的に記述したことである。従来、思考動詞の枠組みや、モダリティ研究で触れられていても、体系的な研究はまだ多くはなく、「ト思う」を動詞全般や、モダリティ形式の中で位置づけられたと考える。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、日本語の動詞述語文の中で特に埋め込み節をとる構文を主たる研究の対象としており、構文・意味・語用論の立場から分析しているばかりでなく、それを人間の精神活動と言語形式との関係のモデル化にまで発展させているのが大きな特徴としてあげられる。

まず、埋め込み節がとれるか否かという観点から、日本語動詞の新しい分類を提唱している。動詞全体の中で埋め込み節がとれる動詞はどういう動詞かを考え、先行研究を発展させた形で外的活動と内的活動とに関わる動詞に大別している。外的活動動詞とは、肉体的動作（食べる・歩く）などを表すのに対し、内的活動は知情意に関わる動詞（思う・恐れる）などである。外的活動動詞と内的活動動詞の両極の間に位置付けられてきた、五感の発動に関わる動詞（見る・聞く）などや発話活動に関わる動詞（言う、話す）なども、内的活動動詞と同様に埋め込み節をとることができることから、内的活動動詞と合わせて「態度動詞」として新たに分類している。外的活動は内的活動に取り込むことができるのに対し、その逆は不可能である点では、態度動詞と他の動詞（非態度動詞）が根本的に異なることを示している。

ここでいう「精神活動」は、ある事態の捉え方とそれを言語化したときの発話の態度からなるものである。ある事態の捉え方の範疇としては、＜直接知覚＞、＜間接知覚＞、＜認知＞、＜思考＞、＜感情＞の5種を設定している。それぞれの範疇には、言語形式として動詞述語文の動詞とその動詞がとる補文標識（の・こと）と助詞（と）の選択が関係すると主張して、＜直接知覚＞には「のを見る」、＜間接知覚＞には「と聞く」、＜認知＞には「のを知る」、＜思考＞には「とと思う」、＜感情＞には「ことに驚く」がそれぞれ該当するものとして分析されている。

また、「発話の態度」とは、認識時と発話時の時間的な関係をさしている。例えば、上記の5範疇に振り分けられた動詞（非過去形）とその補文標識の中で唯一不自然ではない「とと思う」埋め込み文の説明として、認識時と発話時が一致しているからだと分析している。

「態度動詞」については、状況の指向する時間（ET）と認識の関係、また、認識時と発話時の関係をアスペクト・テンス形式や人称の観点から分析し、文の表す状況（事態）・認識の状況・発話の状況という3種の階層を示し、

3種の階層の分析に基づいて、『態度動詞』の規定と分類を行い、事例の分析も行っている。また、コミュニケーション機能として、知識と意識レベルと、認識と伝達レベルの、それぞれ2種の異なるレベルから分析を施している。また、論文の後半では従来深く取り上げられることが少なかった「と思う」について、詳細な分析がなされている。

本研究が特に評価される点は、埋め込み節をとる動詞述語文の研究では、従来動詞の分類・補文標識と助詞の分析・埋め込み節の内容に関する異なったアプローチで進められてきたのを、一つの視点で捉えなおしたことである。また、「知識へのアクセス」「話し手と聞き手の知識関係」など、語用論的機能にまで発展させたことも従来の研究には見られない特徴である。さらには、人間の精神活動と言語形式との関係のモデル化を進めた点にも新規性が見られる。

しかし、「態度動詞」という新しい分類の仕方という新しい提案は、一部の動詞について検証しているのみで、十分なデータにバックアップされたとは言えない。また、精神活動と言語形式との関係のモデルの妥当性も十分に検証されているとは言いがたいという大きな課題を残している。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。